阪神淡路大震災

西条基樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
阪神淡路大震災

【Ｎコード】
Ｎ２５０２Ｘ

【作者名】
西条基樹

【あらすじ】
東日本大震災で復旧中のこの時期に、１６年前の「阪神淡路大震災」のことを書くのはどうかと悩みましたが、今だからこそ書いた方がいいのではないかと思い、書き始めました。
まだレポートがまとまっていない状態なので途切れ途切れに掲載することになるかと思いますが、阪神淡路大震災を体験された「祐子さん（仮名）」にもご協力いただきながら、最後まで頑張って書きたいと思います。
※この中で、祐子さんの記憶と事実（時間）が異なる場合があるか

もしれませんことを、ご了承願います。またこのお話は「事実を元にしたフィクション」です。

その日

１９９５年1月１７日　５時４６分　西宮市ー
何か、ドーン！という大きな音がしたような気がした…。

……

「！…地震！？」

祐子は隣で寝ている1歳半の娘の上に、四つん這いになり覆いかぶさった。お腹の中にも命が宿っている。そのお腹もかばうようにして、揺れが止まるのを待った。
…だが、揺れはなかなか止まらない。それもかなり強い。
祐子の足もとに、４歳年下の妹「明子」がふとんを頭にかぶって震えている。
揺れる中、祐子の体の下で娘が泣き出した。

「あやめ…大丈夫やで！」

祐子は、そう幼い娘に言った。あやめは小さな体を震わせて泣き続けている。

「…長いな…」

祐子が思わずそうつぶやいた時、揺れは止まった。

「…止まった？」

妹の明子が布団から顔を出し、震える声で言った。

「動きな！余震があるで！」

祐子がそう言ってしばらくしてから、本当に余震が来た。

「強いっ！」

祐子は思わずそう叫んでいた。だが、その余震はすぐに止まった。止まってから、祐子は部屋の中を見渡した。タンスや家具がすべて建付けだったのが助かった。何も倒れたものはない。

「祐子ーっ！あやめっ！大丈夫っ！？」

階段の下から、母親の声がした。

「大丈夫やっ！皆、大丈夫！」

祐子が声を上げて答えた。明子は何か呆然としている。

母親が叫んだ。

「まだ動きなさんなよ！余震が来るかもしれんから！」

「わかった！」

祐子はそう答えて、泣いている娘を起こし抱きしめた。

…電気も何も消えて真っ暗だ。その時は、今いったい何時なのかわからなかった。

……

明るくなってから、祐子は娘を抱いて、2階から1階に降りた。明子がついてきている。
1階のリビングで立って待っていた母親が、もう落ち着いているあやめを抱いた。父親がこたつの前に座り、祐子たちに座れと言うように手招きした。
皆、こたつの周りに座った。母親があやめを撫でながら言った。

「良かったー…皆、なんともなくて…」
「家…大丈夫やろか…？なんか潰れてない？」
「…わからんわ…。外に出るのも怖いし。」
「うん、出ん方がええわ。」

そう言った時、外から近所の人たちの声がした。

「えらい揺れでしたねぇ…」
「お宅大丈夫ですか？」
「…瓦がかなり落ちてしもて…」

あの揺れだったら、そうだろうな…と祐子は思った。

電気もガスも止まっているようだ。幸いなのは、水道が止まっていなかったことだった。
だが、水は茶色で飲めるようなもんじゃなかった。それでもトイレが流れてくれただけで助かる。

……

「ほんまに良かった…。これで祐子とあやめが死んでたりしてたら…一生後悔するとこやった。」

父親がぽつりと言った。実は今年の正月に祐子たちは実家に帰れなかった。そのため、父親が「１６日から泊りで来いよ」と呼んだのだ。

「ほんまやなぁ…。まさかこんな地震が起こるやなんて…」

「ラジオ！つながったで！」

明子が乾電池を入れたＣＤラジカセを持ってきながら言った。電気が通っていないため、テレビはまだつかない。

何かアナウンサーの声が震えているのがわかる。…皆、黙って聞いていたが、しばらくしてお互いに顔を見合わせた。

「…なんか、まるで爆弾が落ちたような…戦場みたいなこと言ってへん？」

「…ん、そうやな…。今、神戸言うたか？…火事がなんとかって言ってるな…」

自分の地域が落ち着いているだけに、まだ「大変なことになっている」という実感はないのだが、ラジオを聞いているうちに、何か全員が恐怖を感じはじめた。

その時、ぐらっと揺れが起こった。

「余震やっ！！」

父親が叫び、母親が思わず膝に乗せていたあやめを抱きしめた。皆、あやめを守ろうと思わず体を乗り出したが、揺れはすぐに止まった。

「はぁー…」

明子がため息をついた。

「…怖いわ…なんか…」
「ん…これ…いつまで続くんやろな…」
祐子の言葉に、全員が黙り込んだ。
……
その頃、大阪市にいる祐子の主人「守（まもる）」は、社宅から歩いて１０分の会社に向かっていた。
「久々に揺れたなぁ。食器棚の中、結構グラスとか割れてたし…帰ってから片づけるか。」
守は揺れを感じた後またうとうとと寝てしまい、テレビを見ないで外に出たため、まだ祐子たちが大変な思いをしていることに気づいていなかった。
…守は会社のビルに入り、自分の部署に向かった。そして「おはよー」と言いながらドアを開くと、同じ社宅に住んでいる「伊藤」しかいなかった。
「あれ？…伊藤？…皆、来てへんのか？」
「ん、そうやねん。どうしたんやろな。」
「あの揺れで電車止まっとるんちゃうか？」
「あー結構揺れたもんな…。」
伊藤はそう言ってから「テレビ見てみよか」と、会議室に入って行った。
その時、朝礼のチャイムがなった。９時だ。

…守は、テレビの前の椅子に座った。伊藤がテレビをつけた。
そして、同時に声を上げた。

「！！なんやこれ！？」

テレビの画面には、火が燃え盛っている神戸が映し出されている。

「えっ！？…どういうことや！？」

2人は思わず、テレビにかじりつくように近づいた。

『…を震源として、マグニチュード7規模の…』

「マグニチュード7っ！？」

守は、そこでやっと妻と娘の顔が頭に浮かんだ。

「神戸でこんなやったら…もしかして西宮も…」

守はそうつぶやくと、会議室を飛び出した。

……

この頃は、携帯電話はほとんど普及していなかった。守も持っていない。
守は階段を駆け下りて、1階の公衆電話に向かった。

「！！！！」

3台の公衆電話の前に、それぞれ行列が出来ている。

「…どうしたらええんや…」

守は思わずそうつぶやいて呆然としていたが、とにかく1つの行列に並んだ。

（まさか…まさか…西宮も…）

守は、体中に鳥肌が立つのを感じはじめていた。

（あやめ…！無事でいてくれ！）

守はそう思いながら、思わず両手を組んで額に押し付けていた。

その日（後書き）

……

お久しぶりです。今回はシリアスなレポートとなります。
もし、俺が祐子さんだったらどうするか…また、ご主人の守さんだったらどうするのか考えながら書き始めました。
今回も見切り発進なので、かなり途切れ途切れになるかと思いますが、最後まで読んでいただけるとうれしいです。

西条基樹

もどかしい思い

「守さんって、冷たい人やねぇ。」

石油ストーブをつけながら、祐子の母親が言った。

「え？」

「電話も掛けてこうへんなんて…」

…その時、誰も電話がつながらなくなっているなんてことは、全く思っていなかった。

「大阪は震度弱いみたいやし…気付いてへんのちゃうの？」

「でも、テレビくらいは見るやろ？」

「！…そういや、そうか…」

父親と妹は、寒いためか何も言わない。母親は祐子に「あんたがあやめを抱いてここに座りなさい。」と言った。

「お腹も冷やしたらあかんし。ほら。」

祐子は何か申し訳ない気がしたが、石油ストーブの前に座った。まだ電気もガスも通っていないため、底冷えがひどい。一応皆、分厚い半纏を着てこたつに入って入るが、それだけでは温まらなかった。…しばらくして、石油ストーブのおかげで、少しずつ空気が温まって来た。

「ポットのお湯が冷めへんうちに、あやめのミルク作っておかなね。」

母親はそう言って立ち上がった。元々気の利く方だが、こういう時そんな母親が本当に頼もしく感じる。

「食べるもんとか大丈夫なん？」

祐子は、機嫌よく膝に座っているあやめの体をさすりながら、母親に言った。

「一応、量的に2、3日は大丈夫やけど…このまま電気が通らんかったら、冷蔵庫の中のもんだめになるからなぁ。今のうちに何か作っとくか。」

母親がそう言うと、妹の明子が「手伝うわ。」と言って立ち上がった。

祐子は、ずっと何も言わない父親をふと見た。父親は何かを考えているかのように黙りこくっている。

話しかける雰囲気でもなかったので、祐子は何も言わず、ただあやめの体をさすっていた。

ラジオはずっと、地震の被害を伝えている…。

……

どれくらい並んでいたのか…。前に立っている男性が、急に守に振り返って言った。

「つながらないそうなんですよ…電話…」

「えっ！？つながらないんですか！？」

「ええ…。…困りましたね…」

「…そうですね…。」

それで、ずっと前に進まないんだ…と守は思った。男性が口を開いた。

「ご家族があちらにいるんですか？」

「え？…あ、ええ…。妻と娘が西宮の実家に帰っていて…」

「西宮ですか！…それは確かに心配ですね。」

「…あなたは？」

「私は、宝塚の方です。両親が住んでいましてね。…全く情報が入らないので、不安で不安で…」

「…そうですよね…」

２人はまたそこで黙りこんだ。その時、前の方が騒がしくなった。

「繋がったって！」

前の方でそんな女性の声がした。その場にいた全員が喜びの声を上げた。

……

守は自分の番になり、公衆電話に１００円玉を入れた。そして、震える指で妻の実家の電話番号をプッシュした。

…呼び出し音が鳴った！

守はほっとしながら、電話が取られるのを待っていた。

…５コールほど鳴った頃だろうか。電話が取られた。

「もしもしっ！」

守は受話器を両手で抱き締めるようにして叫んだ。

「守さん？」

祐子の母親の声だ。守は「大丈夫ですかっ！？」と言った。

「！！ええ！皆、大丈夫よ！」

「良かった…！今、公衆電話から掛けているんですが、断線していたようでなかなか…」

「まぁっ！そうやったのっ！？」

母親のそんな声が返って来た。…守は、まさかその母親に「冷たい」と言われていたことなんて知らない。母親が慌てるように言った。

「公衆電話なのね？すぐに祐子に代わるわ！」

「はい！」

すぐに祐子の「守さん！」という声がした。守はほっとしながら言った。

「無事で良かったよ！俺、何も知らんと会社に行って、会社のテレビでニュース見てさ…。ほんまにびっくりして…」

「こっちは震度４やったけど、地盤が強かったようで大丈夫やったんよ。」

「…あやめは泣いてへんか？」

「それが、何かわかってるんかな。泣きもせずおとなしくしてるわ。ちょっと待って。」

その声の後に「パッパー！」と言う娘の声がした。守は、突然涙が

溢れるのを抑えられなかった。

……

「これからどうするかやな。」

軽い食事を済ませた後、父親がぽつりとそう呟いた。

「そうねぇ。お父さん、車のガソリン残ってる？」

「ん。残ってはいるけど…店はどこもやってないやろうし…道もどこまで続いているか…」

「！…そう…そうやねぇ。」

闇雲に車で出ても結局引き返すことになるなら、それだけ燃料の無駄ということになってしまう。

祐子の住んでいるところは、西宮と言っても、歩いていける場所にスーパーもコンビニもないような山の中である。

母親は、毎日バスに３０分程揺られて買い物に行かねばならなかった。だが、それが逆に良かったのだ。…昨日から祐子とあやめが来るということで、母親は３、４日分の食料をまとめて買っていたのである。石油ストーブの灯油も余分に用意していたし、あやめのおむつもまとめ買いしていたため、後２、３日ならば、動けなくてもなんとかいけそうである。

…だが、ある意味「たったの」２、３日だ。…このままずっと電気もガスも通らないようであれば、後、どうすればいいのかわからない…。

いつの間にか、全員が黙りこんでいた。

その時、あやめが急にきゃっきゃっと笑い出した。皆、驚いて、あやめを見た。

…あやめがどうして笑ったのかわからない。…だが、そのあやめの笑顔を見て、全員が思わず笑い出していた。

「どうしたんやろねぇ…あやめ…急に…」

母親が笑いながら言った。父親も今は頬が緩んでいる。いつの間にか、その場が和んでいた。

……

「車で行っても…無理か。電車も止まってるなぁ…」

守は社宅に帰り、独りテレビを見ながら途方に暮れていた。すぐにでも、妻と娘を迎えに行きたい。…だが、交通手段がすべて寸断されているようだった。

「水も食べ物もしばらくはある言うてたけど…あーっもうっ！！俺、どうしたらええんやっ！！」

守はソファーから立ち上がって、その場をうろうろとした。そんなことをしていたって仕方がないのだが、じっとしてはいられなかった。

電話はまた繋がらなくなっていた。あの時公衆電話ではなく、どうして社宅に帰って電話しなかったのか、守は今になって後悔していた。

（あほや俺ー。ほんまあほや。）

守はそう思うと、またソファーにどさっと座り込んだ。

その時、テレビから緊急情報を告げるチャイムの様な音が鳴った。
テレビ画面の上の方で「地震速報」と出ている。
守は、思わず身を乗り出した。

「震度３の余震…宝塚市…神戸市北区…〇〇区…西宮市！？」

……

その５分前、祐子達は突然の強い余震に体を強張らせていた。小さな余震はそれまでに何度もあった。その余震のたびに、全員が鬼気迫る顔をしてあやめを守ろうとするので、あやめが揺れるたびに泣き出すようになった。
…あやめからしたら、いつも優しい「じいじ」や「ばあば」が怖い顔をしてこっちを見るので、襲いかかられるような恐怖を感じるのだろう。祐子は泣き叫ぶあやめを抱き上げて「よしよし」と言いながら立ち上がった。

「大丈夫、大丈夫…誰もあやめを食おうとしてるわけやないからねー」

それを聞いた父親達は、苦笑して顔を見合わせていた。

……

守は電話を何度も掛け直した。だが掛からない。…地震で大丈夫だったとはいえ、余震できしんでいた家が倒れることだってあるかもしれない。
守は受話器を音を立てて置いた。

「あーー！もどかしいっ！！何もできんなんて…もう俺どうしたらええんや…！！」

守はそう言って、またソファーに座り頭を抱えた。…どうすることもできない自分に腹が立った。

「こんなことなら、仕事休んででも一緒に行きゃぁ良かった…。」

守は自分の頭を叩きながら、そう自戒し続けていた…。

溢れ出た涙

「あー！カセットコンロ、あと1つしかないわ！」

母親がそう声を上げたのを聞いて、祐子は驚いてキッチンに振り返った。

「あと1つしかないん？」

「ん…さっき、朝食作る時に結構使ってしもたから…これもあんまり残ってないなぁ」

「もうポットの水、冷めてしもたやろか？」

「冷めたんちゃうかなぁ…。あやめのミルクだけでも作れる分、置いとかなあかんわ。」

…さすがに、もう母乳は出ないよなぁ…と祐子は思った。その時、トイレに行っていた妹が、リビングに飛び込んで来た。

「お母さんっ！電気通ってるっ！トイレの便座のランプついてんねん！」

「えっ！？ほんまっ！？」

全員がそう言って取った行動はバラバラだった。

母親は、あやめのミルクを作るために抜いたポットのコンセントを差した。

父親は、テレビの電源をつけた。

祐子は、こたつのスイッチを入れた。

妹は（もう明るいのに）電灯の紐を引っ張っていた…。

すべてがついたのを確認して、皆が同時に「おーーっ！」と声を上げた。…上げてから、全員で笑ってしまった。

…だが、すぐにその笑い声は途絶えた。

テレビに映る神戸の様子があまりにも悲惨な状況だったからだ。ヘリコプターから撮影されたものだった。アナウンサーの悲痛な声が響いている。

「まるで戦争の後のようです！火がまだ消えません！焼け野原のようになっております！」

本当にその通りだった。神戸の綺麗だったはずの街並みが、真っ黒になっていた。そして、至る所にまだ火が残っている。

「あっ！揺れましたっ！今…地面が揺れたような様子です…」

アナウンサーがそう言ったとたん、祐子達も揺れを感じた。だが、小さな揺れだ。…祐子達はもう余震になれてしまっていた。ただ、あやめだけが火がついたように泣き出した。

「ごめんごめん！あやめ！大丈夫！何もないんやで！」

祐子はそう言って、あやめの体を自分の方に向かせて抱き締め、背中を撫でた。

「ほら、あやめミルク！ミルク飲も！」

母親がやっと温まったミルクの入った哺乳瓶を差し出した。あやめは泣きやんで、両手で受け取った。

祐子はあやめを膝に下ろした。あやめはゴクゴクと喉を鳴らして、ミルクを飲み始めた。

「…でも、お母さん、こんなに飲ませて大丈夫か？まだ残ってる？」

「ミルクは、大きいのが後2缶もあるねん。私ら死んでも、あやめは生き残れるで！」

その母親の言葉に全員が思わず吹き出した。

「誰か1人、ミルク作る人が残ってなあかんやろ。」

「…あ、そうか。」

全員が笑った。…電気が通っただけで、何か気持ちに余裕が出てきたような気がした。

……

その頃、守は心配のしすぎで、ベッドに倒れ込んでいた。

会社に行く前に、パンを1つだけ食べた後は何も食べていない。

（あやめもお腹を空かせてるんや。俺だけが食べるわけにいかへん。）

何も知らない守は、その思いで何も口にする気にならなかったのである。

「俺、このまま餓死してしもたりして…」

守は思わずそう呟いて「そらあかんっ！」と言って、慌てて起き上がった。

「俺が死んでしもたら、誰があやめを迎えに行くねんっ！そや！死んでる場合やないっ！！」

守は慌てるようにキッチンに入った。そして冷蔵庫の中を覗き込んで、卵を取り出した。

「あやめ！待ってろよー！パパが絶対に迎えに行くからなっ！！」

守はそう言いながら、フライパンを取り出した。

……

電話が鳴った。母親が慌てて電話機に走った。

「はい！ああ、守さん！あれからも断線してたようやねぇ！待ってね！祐子に代わるから！」

母親はそう言いながら、祐子に手招きをしている。祐子は、手を差し出している父親にあやめを預けて、電話に駆け寄った。

「守さん、こっちやっと電気が通って…えっ？」

祐子が驚いた声を上げたので、皆祐子の方を見た。

「こっち来るって、どうやって？…うん…途中まで車で来て…？…あかんかったら、そっから歩くっ！？いや、待って守さん！そこまでせんでも…」

祐子が慌てふためいているのを見て、母親が何か笑いながら祐子に

駆け寄っている。

「いや、大丈夫やねんて！あやめのミルクだけはいっぱいあるし、とりあえず電気が通ったから、ご飯も作れるねん。…えっ？食べ物？…うーん…私らのは、後2日分くらいしかないけど…いや、だからぁっ！」

祐子が笑い出した。母親が何か隣で笑いながら立っている。

「途中から歩いて来るにしても、歩いとったら3日で着かへんやろ？…気持ちは嬉しいけど、守さんは逆にそっちで待ってて欲しいねん。そっちに帰った時に、また何もなかったら困るから！うん、うん！お父さんの車もあるから、道さえ通ったら、こっちから動けるから！あーもう、何泣いてんの！！」

祐子がつられたのか、そう言って泣き出した。

「泣かんといて、守さん。その気持ちだけで嬉しいから。…うん、うん…とりあえず、あやめは大丈夫やし、皆元気やから…。うん…。」

母親が隣で涙を拭い始めた。その時祐子は、自分達が必死に元気ぶっていたことに気付いた。父親もさっと涙を拭った。明子は両手で顔を覆っている。

「うん、ありがと。とにかく、もう少し様子見て…うん。そっち、店開いてるんやったら、いっぱい何か買っといて。…うん、守さんもちゃんと食べなあかんで。うん、うん…じゃぁね。また明日こっちから電話するから。うん。あ、あやめな。ちょっと待ってや！」

祐子は受話器を母親に渡した。そして父親が抱きあげたあやめを受け取ると、何か話している母親の元へ戻った。

「…ほら、あやめ「パパ」やで…」

祐子がそう言うと、向こうに聞こえたのか、守が「あやめ！」と言った。あやめは受話器を両手で握りしめるようにして「パパ、パパ」と言った。

…祐子と母親は思わず溢れ出た涙を拭った。

忘れられたパパ

祐子が大阪市に帰れたのは…1週間後だったか、2週間後だったか…記憶があやふやである。ただ月は変わっていなかったと思う。2、3日しかなかった食料も、すぐに近所の道路は通ったため、底をつく前に買い足すことができた。

ただ情報がほとんどないので、どこまで行けるのかわからなかった。そのうちにご近所からの情報で、電車なら大阪まで出られることがわかり、父親の運転する車で最寄りの駅まで送ってもらった。その時、母親もついてきた。祐子は遠慮したが「家にずっといると気が滅入る」と言われ、大阪まで一緒に行こうという事になった。父親は「電車が途中で止まれへんやろか」と心配していたが、最後まで止まることはなかった。

…だが電車の中から見える風景に、母親も祐子も驚愕した。

「あの…マンション、斜めになってる…。えらいことになってるねぇ…」

「うわ…！古い家が…あれ燃えたんか？」

そんな祐子たちを、乗客が冷たい目で見ていたような気がする。…今頃何を言ってるんだ？…というような様子だった。

……

「あやめっ！」

祐子がかばんから鍵を取り出そうとしていると、すぐに守が玄関を開けて出てきた。

あやめは祐子の母親にだっこされたまま、きょとんとした目で守を見ている。
祐子は、荷物を玄関に置きながら言った。
「守さん、会社は？」
「今日は休んだんや！あやめが帰ってくるのに行ってられるかいな！なぁあやめ！」
守はそう言ってあやめに両手を差し出した。だがあやめは守から顔を背けて、母親の首に抱きついた。
「あやめ？」
守も祐子もあやめに抱きつかれた母親も、驚いてあやめを見た。
「あやめ？どうした？パパやで…ほら、こっち見てや…」
守はそう言ったが、あやめは母親に抱きついたまま動かない。
「…まさか…俺の事忘れたんか？」
守が愕然として言った。祐子は驚いた。電話では守の声をちゃんと認識していたのに、顔を忘れてしまったのか…？…だが、考えてみればあやめはまだ1歳だ。1週間以上も離れれば、確かに忘れてしまうのかもしれない。
「うそや…」
守が玄関に座り込んでしまった。

「守さんっ！すぐ思い出すって！ちょっと向こうでいろいろあったから、あやめもまだ混乱してんねんて！」

祐子が慌てるように、守の肩に手を乗せて言った。母親は必死に「ほら、あやめの好きなパパやんか！あやめ！」と言い、あやめの体を守に向けようとした。

だが、あやめはしがみついたまま動かなかった。

……

「ショックや…」

結局、守を見ないで寝入ってしまったあやめの寝顔を見ながら、守がつぶやいた。

「目が覚めたら、だっこしたり。思い出すって。」

ダイニングで祐子がコーヒーを淹れながら言った。母親がコーヒーを一口飲んでから言った。

「…だけど…ほんの短い時間で忘れてしまうんやねぇ…。」

「私らにしたら短くても、あやめには長い時間やったんかもしれんね。…ほら、小学校の時、卒業までの6年間って長く感じたけど、今、1年経つのがすごく早く感じるやん。」

「そういやそうやねぇ…」

「…親子でも…子どもが小さいうちは、ちょっとでも離れたらあかんね。」

祐子はそう言いながら「守さん、コーヒー入ったよ。」と言った。

守はあやめの寝る布団のそばであぐらを掻いて座り、あやめの小さ

な手を優しく握りながら黙っている。
祐子はコーヒーカップを持って、守の傍に置いた。
「大丈夫？守さん。」
祐子はそう言って、守の顔を覗き込んだ。守は真剣な表情で、あやめの寝顔を見ている。
「俺…これからはあやめから離れへん。」
「は？」
「ずっとあやめの傍におる。」
祐子は笑った。
「そんなこと言うとったら、仕事も行かれへんやないの！」
「…そやけど…！」
守が祐子に向いて、涙をボロボロ流して言った。
「お前にわかるっ！？俺の今の気持ちっ！！娘に忘れられたんやぞ！！さっきのあやめの表情見とったか！？俺の顔をまるで「誰このおっちゃん」みたいな目したんやぞ！」
「もおおお、守さん！」
祐子は守の頭をなでなでしながら言った。
「考え過ぎ！目が覚めたら、一番に顔を見たり。思い出すから！」
「お前なぁ！あやめを鳥みたいに言うなっ！！」
守が涙をこぶしで拭いながら言った。祐子は笑ってしまった。

その時、あやめが目を覚ました。

「あやめ！」

祐子が先に気づいて言った。守は、はっとしてあやめを見た。

「あやめ！」

あやめはしばらく守の顔を見つめてから「パパ」と両手を差し出した。

祐子は「ほら！思い出した！」と言った。

「うおおおおっ！あやめーっ！！」

守はそう言うと、あやめを抱え上げて抱きしめた。

祐子と母親は顔を見合わせて、笑ってしまった。

……

「はいはい。次はどこですかー？」

守はあやめを背中に乗せ、四つん這いで和室を回っている。あやめはきゃっきゃっと喜んで、守の背中を叩いていた。

祐子と母親は、笑いながらそんな2人を見ていた。

「あー…どうなるかと思った。」

祐子はそう言って、コーヒーを一口飲んだ。

「ほんまやね。」

母親がそう言って笑ってから「ごちそうさま」と言って、立ち上がった。

「帰る？」

祐子がそう不安そうに言うと、母親は微笑みながら「うん」と言った。

「今夜泊まったら？お父さんもええ言うとったやんか。」

「いや、明子もいるしな、帰るわ。」

「…そうやね…」

祐子も立ち上がった。

「守さん、お母さん帰るって。」

「え？泊まらないんですか？」

「ええ、ありがと。うちにも子どもが2人いるようなもんでね。」

母親がそう言って笑った。祐子が守の背中から、あやめを抱き上げた。

「あやめ、ばあば帰るって。」

あやめは「ばーば」と言って、両手を母親に差し出した。母親はそのあやめを抱き上げた。

「じゃぁ、あやめ元気でね！また来るからね！」

母親はそう言ったが、あやめは母親の首に抱きついたまま離れよう

としなかった。

「あやめ、ほら…」

祐子が離そうとするが、あやめは離れようとしない。

「祐子ごめん、お願い。」

母親が涙ぐみながら言った。祐子も涙ぐみながら、ゆっくりとあやめを母親から引き剥がすように、抱き上げた。あやめが火がついたように泣き出した。

母親は急ぐように靴を履いた。

「お母さん、気を付けて！なんかあったら、どこからでもええから電話してな。」

「うん。」

母親は、泣いているあやめを見ないようにして、玄関を自分で開け外へ出てしまった。

「守さん、あやめお願い。」

祐子は隣に立っている守に言った。守がうなずいて、泣いているあやめを抱いた。

祐子は階段を降りる母親を追いかけた。

「お母さん、駅まで一緒に行くわ！」

「…うん…」

母親は涙を拭っている。祐子も涙を拭いながら、母親について階段

を降りた。

……

「もう…大きな余震もないとは思うけど…とにかく気を付けてな。」

祐子は改札を入ろうとする母親に言った。

「うん。家についたらすぐに電話するわ。」

「うん、そうして。待ってるから。」

「うん。」

大した言葉もかけられないまま、祐子は手を振る母親に手を振り返した。母親の背がエスカレーターに消えた。

「…今度、いつ帰れんのやろな…」

祐子は思わずそう呟いていた。

生きているという奇跡

「…もう、腹立って…腹立って…」

電話の向こうで、祐子が勤めていた会社の同僚だった「香奈」が声を震わせてそう言った。

「……」

祐子は答えられなかった。香奈は今結婚して「滋賀」に住んでいるのだが、実家は「西宮」である。だが同じ西宮でも祐子のいる田舎とは違い、開けた場所だ。

…そこの被害はひどかったそうだ。香奈の実家は古かったこともあり「半壊」だった。祐子も遊びに行ったことがあっただけに、ショックを受けた。

香奈は、自分の生まれ育った家が壊れているのを目の当たりにして、思わずその場でしゃがみ込んで泣いたと言う。

震災の時、その家には香奈の祖母と母親だけがいたが、奇跡的に無事だった。だが「半壊」とはいえ、もうその家には住むことができないので、電車が通ってから香奈が実家に行き、滋賀まで連れて帰ったのだそうだ。

…香奈が怒っているのは、その時の大阪駅の様子だった。

「バーゲンしてんねんでっ！！バーゲンっ！！皆、何もなかったかのように袋いっぱい持ってっ！！」

祐子はどう答えればいいのかわからなかった。…正直、それは仕方のないことではないかと思った。…しかしそれは、自分の実家が「

一部損壊」で済んだから、そう思えるのではないかと後で反省した。
…同じ震災被害者でも、被害の程度によって感じる温度差がこれだけ違う…。

…その１６年後の現在…２０１１年３月１４日に起こった東日本大震災の時は、全国的に「自粛」ムードが自然発生的に起こった。…だが、この頃は今ほど「自粛」ムードはなかったように思う…と祐子は回想する。

祐子たちも大阪に戻ってからは普通の生活に戻った。西宮の実家も簡単な修復で済み、翌２月の末には何もなかったかのように、祐子たちは実家に帰ることができた。
…だが被害の大きなところは、復旧のめどがなかなか立っていなかったように思う。

……

祐子はテレビで神戸のどこだったか…避難所の様子が映されたテレビをぼんやりと見ていた。
これも震災からどれくらい経っていたのか覚えていない。だが自分が普通に生活をしているのが申し訳なく思うほど、まだ多くの人が避難所にいた。
その中で１人の男性が、インタビューに答えていた。

「ご家族の方は、皆さんご無事だったのですか？」
「いえ。妻が死にました。」

感情も何も抜け落ちてしまったかのような表情で答える男性に、アナウンサーの方がうろたえている。

「…お家の方は…」
「燃えました。…妻は子どもと俺の弁当を作っていて…何かを揚げていたんです。…地震が起きて、油に火が移って…妻はその中で焼け死んでしまいました…」
「！……」
「今でも妻の悲鳴が耳に残っています。…妻は「ドアを開けて！」と叫んでいるんですが、体当たりしてもドアを開けてやることができなかった。長い悲鳴が聞こえて…声がしなくなって…」
…祐子は耳を塞ぎたい衝動に駆られた。
その後も、タンスの下敷きになった弟の泣き声が消えていくのを最後まで聞いていた女児の話…。潰れた家の下敷きになった近所のおばあさんを助けようと、がれきを必死にどけているときに火が回って来て逃げてしまった…と言う男性の話…。
…悲惨な話が続いた。祐子はあまりの辛さに、テレビを消そうと思いながらも消してはだめだと思い、最後まで聞いた。
「…避難所からの中継でした。」
アナウンサーの姿が消え…ニュースが終わり、ＣＭが流れた。…やたらと呑気で明るい音楽のＣＭ…。
（「ドーン！」という音がしたようなあの地震の瞬間に、あれだけの悲劇が起こってたんや…。）
祐子はそう思い、自分の膝で寝ているあやめを抱きしめた。「奇跡」という言葉が、祐子の頭をよぎった。

東日本大震災

１６年後－２０１１年３月１４日　９時

「ただ今より、卒業式を行います。」

父兄たちは生徒たちと一緒に立ち上がった。その中に祐子と守もいた。

今日は、息子「勇人（はやと）」の卒業式である。…そう、阪神淡路大震災の時に、祐子のお腹の中にいた「息子」だ。それがもう、祐子と守の背を超えて大きくなり、今中学の卒業を迎えている。

「勇人」は名前を呼ばれ、元気に「はい！」と答えて壇上に向かった。そして卒業証書を受け取り、振り返って一礼した。

「…月日の経つのは早いわー」

祐子が思わずそう言うと、隣で守もうなずいた。

震災の時１歳半だった「あやめ」は、この４月から「高校３年生」になる。大学に行かずに就職すると言っている。そのことに、祐子と守は頭を悩ましていた。…しかし、そんな悩みも生きているからできるのだ。

祐子の父親は震災の２年後に脳溢血で死んでしまった。母親は今も健在で、いまだ結婚していない明子が一緒に暮らしてくれている。

…そして、勇人の卒業式が終わったその日の昼…２時４６分－

東日本大震災が発生した…。

……

「社長…なんか揺れてません？」

息子の卒業式が終わって、すぐに事務所に入っていた祐子は、斜め前の席に座っている社長に言った。

祐子は今「建築業」の会社で、事務員として働かせてもらっている。

「え？揺れてるか？」

社長がきょとんとして言った。祐子は「気のせいですかね。」と苦笑した。

（私、めまいでも起こしたんかな…。そういや、そろそろ更年期障害になる年やなぁ…）

祐子はそう思いながら、パソコンの画面に向いた。その時、ずっと流れていたラジオから「東北地方で強い地震が起こり…」というようなアナウンスが流れた。

「！？東北！？」

祐子が思わずそう言いながら、ラジオを見た。社長は「東北で地震か…あっちは多いからなぁ」と呑気に言った。

「ちょっと、行ってくるわ。」

「あ、はい！」

祐子は社長が出て行くのを見送った。

……

祐子はラジオを聞きながら、体を強張らせていた。
地震で大きな津波が起こり、数百人の死者が出たという悲痛なアナウンサーの声が響いている。

（…阪神淡路大震災の時、津波はなかったんやったっけ…）

祐子がそう思った時、社長が厳しい表情をして帰ってきた。祐子は「お帰りなさい！」と言った。
社長が、かばんを机の上に置きながら言った。

「…車の中でカーナビのテレビ見てたんやけど…。えらいことになってるで。…津波にやられたら、水掃くのもなかなかできへん…。…阪神の時より被害は大きくなるかもしれんな。」
「！！」

祐子は何も言えず、黙って座る社長の顔を見ていた。

……

社長はその2か月後、仮設住宅のことで「仙台」に行くと言った。
それも車で行くという。
…翌週、祐子は「どうだったのか」と帰ってきた社長に尋ねた。

「片道１６時間もかかったわ。行きはまだ気が張ってたからええけど、帰りはふらふらや…」

社長は苦笑しながらそう言ってから椅子の背にもたれ、神妙な表情になった。

「…悲惨としか言えへんわ…。外から見たら大丈夫そうなビルでも、中の柱が歪んで潰すしかあらへん。…住宅地なんか土台しか残ってへんのや…。…がれきも半端やない。…どっから手ぇつけたらええのかわからん。」

社長はそう言ってため息をついた。

「阪神の時は、火やったからまだ地盤がちゃんとしてた…でも、津波にやられた向こうは簡単にはなぁ…」

祐子はだまってうつむいた。社長は腕を組み、眉をしかめて言った。

「それも福島の原発のこともあるやろ。」

「…ああ、放射能ですね…」

「ん。俺らみたいな年寄りはええんや。もう後は老いて朽ちていくだけやから。」

…年寄りと言っても、そろそろ更年期障害に入る祐子と年はあまりかわらないのだが…。

社長は腕を組んだまま、少し上を見上げながら言った。

「今の子どもらやなぁ…。なんとか放射能から守ってやらな、将来、夢を持てんことになったら可哀想やで。ただでさえ、この不景気で夢持てんのに…」

祐子は小さくうなずいた。本当にその通りだと思った。社長は机の上に視線を落として言った。

「これで「南海大地震」（※大阪南部に１００年に１回起こると言われている）が来てしもたら、日本沈没してしまうかもしれん。…

俺ら生きてるうちに、来るやろしな。」

祐子は目を見開いて社長の顔を見た。社長は厳しい表情をしたまま黙り込んでいる。

神様はいるのか

東日本大震災から半年後ー

インターホンが鳴った。祐子は黙って玄関に向かい、覗き穴から外を見た。
男性が立っているのが見えた。
祐子はドアを開かず「はい？」と言った。

「あ、すいません。今、キリスト様のお話を…」
「ああ、うちは曹洞宗ですので！！」

祐子はそう言うと、その場を離れた。
…が、突然部屋から出てきた息子「勇人（はやと）」が「宗教の人か？」と言った。

「え？うん。」
「ちょっと聞きたいことがある。」
「え？」

勇人は玄関を開け、立ち去ろうとしていた男性に声を掛けた。

「ちょっと勇人っ！」

祐子は慌てて止めたが遅かった。自然に閉じた玄関のドアに耳を当て、息子の声を聞いた。

「どちらの団体の方ですか？」
「ああいえ、私は個人で布教しておりまして…」

「そうですか。俺、神様のことで聞きたいことがあって…」
「はい、何でしょう？」
祐子は一層強く玄関に耳を当てた。勇人の声がした。
「神様はいるんですか？」
「もちろんいますとも。」
「じゃぁ、どうして（東日本）大震災であれだけの人が死んだんですか？」
男性が一瞬黙り込んだのがわかった。だが、すぐに答えた。
「震災は…神様からの試練です。」
勇人が黙っている。しばらくして「わかりました。ありがとうございました。」という声がして、すぐに勇人が戻ってくる足音が聞こえた。祐子は慌てて、ドアから離れて中へ入った。
男性が勇人に呼び掛けているのが聞こえたが、勇人は何も言わずに入ってきて、ドアの鍵を閉めた。
「…話にならん…」
勇人は一言そう言って、自室に入って行った。祐子は息子の部屋のドアをノックしながら言った。
「ちょっと、何がしたかったんよ！ママに教えてや！」
勇人はドアを開けて、出てきた。何かむすっとしている。そして黙ってダイニングテーブルの前に座った。

「なんか飲むか？」

祐子がそう言うと、勇人は首を振った。祐子は勇人の向かいに座った。

勇人は黙って祐子を見ている。

「あんなこと聞いて、あんたどうするつもりやったん？」

「別に。」

「別にて…何もないわけないやろ？キリスト教の信者にでもなりたいんか？」

「俺、そういうの好きやない。」

「じゃぁ、なんでわざわざ、あの人を引き留めてあんなこと言うたんよ？」

「…神様がおるんかどうか…聞きたかったんや。」

「あのさ…。おる言うに決まってるやんか。向こうは「有神論」者やで。」

「わかってる。…でも、あの人…神様が地震起こしたようなこと言うた。」

「…それが？」

「俺が聞きたかったのはそうやないんや。地震は、地盤のプレートかなんかがどうにかなって起こったもんやと思ってる。…俺が聞きたかったのは…老人とか小さな子供とかが津波で流されて死んでいくのを、神様は黙って見てただけか…って聞きたかったんや。」

「！！！！」

祐子は驚いて目を見開いた。…何か（なるほど）と納得するものがあった。

「でも、あの人…「試練」やって言うた。…なんで小さな子供が試練なんか受けなあかんねん。」

その勇人の言葉に、祐子は腕を組みながら言った。

「…確かにそうやなぁ…。でもまぁあの人、個人的に布教してるって言うてたから、本当のキリスト教の人の考えとは違うかもしれへんよ。」

勇人は何か考えるようにうつむいている。祐子は急に思い出して言った。

「そう言えば、あんたって…赤ちゃんの時から不思議な子やったなぁ…」

「…え？」

勇人は祐子を見た。

「じいじの通夜の晩…あんた、2歳前くらいやったかな…。急に天井の角指差して「じいじ！」って叫んだんや。」

「！？…俺が？」

「うん。じいじ、じいじって何度も叫んどった。でもママにはじいじの姿は見えへんかったわ。」

「…覚えてへん…」

「そりゃ、そうやろ。「覚えてる」て言われた方が怖いわ。」

祐子はそう言って笑った。勇人はまたうつむきながら言った。

「ママ、さっきうちは「曹洞宗」言うとったな。」

「そうや。」

「曹洞宗の人やったら、どう答えるんや？」

「知らん。うちのじいじもパパのじいじも、京都のお寺さんによく

「禅」組みに行ってたけどなぁ。ママは行ったことないわ。だからわからん。」
「ふーん」
「でも、確か死んだ人は皆「仏」様になれるって誰か言ってたわ。仏教って皆そうなんちゃう？キリスト教は「神の僕（しもべ）」？やったっけ…になるけど、仏教はどんな人でも「仏」様になれるとかって。」
「ママは神様おると思うか？」
「さぁなぁ。魂はあると思うけど、神様はどうやろな。…あんたはどうや？」
「俺は、元々「無神論」者や。」
「ほお！その根拠は？」
「神様がいるんやったら…大震災で、何の罪もない人があんなに死ねへんはずや。」
「…うーん…こういう話聞いたことがある。」
「？」

祐子はテーブルに身を乗り出すようにして言った。

「神様は何でもできるけど、何もできへんのやって。」
「…どういう意味や？」
「例えば、ライオンが小鹿を襲おうとしているとする。私らからしたら、小鹿が可哀想やから助けたいと思う。でも神様はライオンが小鹿をしとめへんかったら、そのライオンの子どもが飢え死にしてしまうことを知ってる…」
「！…」
「神様は、どっちにも手ぇ出されへんという訳や。…でも、震災の事はどうやろなぁ…。神様にも事情があって、何もしてやれんかったんとちゃうやろか？」
勇人は腕を組んでうつむき、考え込む様子を見せた。祐子は慌てて

言った。

「ああでも、これは「神様がいる」と仮定してママが考えた話やで！個人的には、ママも「無神論者」や。」

勇人は目だけを上げて、祐子を見た。

「さっき、仏教では「死んだ人は皆「仏様」になる」…言うたやろ。」

「うん。」

「ママもそっちの方の考えや。死んだじいじやご先祖様が「仏様」になって、ママ達を見守ってくれてると思ってる。」

勇人は黙っている。

「なぁ、コーヒー入れるけど飲む？」

祐子はそう言って立ち上がった。

「…うん、飲む。」

勇人が言った。祐子は微笑んで、コーヒーメーカーを棚から下ろした。

（「阪神淡路大震災」の時に腹ん中いた子が、こんな生意気な口を利く子になるとはね。）

祐子がそう思った時、あやめの「ただいまー」という声がした。祐子は慌てて玄関に向かい、疲れた顔をして靴を脱いでいるあやめに言った。

「おかえりっ！！会社の面接どうやったっ！？」
「まぁまぁやない？」
「まぁまぁて…。」
「やることはやったわ。ちょっと寝る。」
「うん。…コーヒー入れるけど…いらんよな？」
「いらん。」
「わかった。ほなお休み。晩御飯に起こしたるわ。」
「うん！」

あやめは自室に入っていった。祐子がダイニングに戻ると、勇人がコーヒーメーカーにコーヒーの粉を入れてくれていた。

「ごめんごめん！やるわ。」
「ええよ。俺がやる。」
「そお？サンキュー！」
「あやめ、どうやったって？」

勇人は小さい時から姉を名前で呼ぶ。あやめも別に気にしていないようだ。祐子は椅子に座りながら言った。

「まぁまぁやったってさ。」
「そう…。受かってるでたぶん。」
「え？」
「…あやめ、受かってる。」
「…！…」

祐子は目を見開いて、息子を見つめた。

……

その日の夕方…学校から「あやめさんの採用が決まりました」という電話があった。
勇人の予言が当たっていたのである。

…祐子は、夜中遅くに仕事から帰ってきた守にその話をした。そして興奮気味に言った。

「勇人こそ、神様かもしれんっ！！」
「あほか。それよりあやめの採用が決まったことを喜べよ。」
「！…あらやだ。ほんまやわ。」

祐子は口に手を当てて言った。守は、あきれたように笑った。

（終）

神様はいるのか（後書き）

お読みくださった皆様、ありがとうございました。そして「お気に入り小説」にご登録いただいた方、ありがとうございました。そして「しっかり読ませていただきます」とコメントいただいたライツさん！いつもありがとうございます。…こんな中途半端な終わり方になり、申し訳ありません。

こちらのサイトは1か月以上連載が滞ると警告みたいなものが出るそうなので、今あるレポートをとりあえずすべてアップし、ここで一旦終わり…とさせていただきました。ですが、今後も何度か書き直したり、お話を追加しようと思っています。そのため、現段階で中途半端なものになってしまったことをお詫びいたします。

実は、俺がこれを書きたいと思ったのは、祐子さんのご子息「勇人（はやと）君」がフリーの宗教家に「神様はいるのか？」と疑問をぶつけた話を聞いたことが発端で、同時に祐子さんが「阪神淡路大震災」を体験されたことを聞き、当時のことを思い出していただきながら書き始めたんです。（つまり本当に見切り発車だったんです（＾＾；）申し訳ありません。）

祐子さんによると「勇人君」は小さいころから他の子とは何か違う感性を持っていたのだとか。…俺的にはすごく興味があるんですが、ご本人の許可が取れないのでレポートにはできなさそうです（；；）

ちなみにその「勇人君」、今でも布教に来た何人かの宗教家に議論を吹っかけているとか…その話の1つを番外編として、最後のお話として載せています。…正直、哲学的な話にまで発展しているので、俺がついていけてませんが（ーー；）思春期の少年ならではと言える、彼の世界をどうぞご堪能ください。

西条基樹

<番外編>息子の論理

ピンポーンとインターホンが鳴った。祐子は玄関まで行き、ドアのぞき窓から外を見た。
女性が立っている。手には何かパンフレットのようなものを持っていた。

「はい、どちらさまでしょう？」

祐子がドア越しにそう言うと（何故かインターホンはいつも使わない）、女性の声が返ってきた。

「すいません。今日は皆様にためになるお話をお聞かせしたく参りました。」
「えーーとーーーどちらかの宗教団体の方でしょうかね？」
「あ、はい。」
「うちは曹洞宗なんですが…」
「あ、宗派関係なくお話をさせていただいておりますので、お時間いただけませんか？」

（居留守使えばよかった…）

祐子はそう思った。別にお金を要求されるわけではないので害がないと言えばないのだが、しつこいのが嫌だ。布教活動に熱心なのはわかるが、どうして人の家に押しかけてまで、自分たちの考えを押し付けてくるんだ…と思う。
その時、祐子はふと息子がテスト中で早く帰っていたことを思い出し、にやりと笑った。

「ちょっと、お待ちいただいてよろしいでしょうか？」
「はい！」
祐子は息子の部屋のドアをノックした。
「勇人（はやと）！出番やで！宗教の人来たっ！」
部屋の中からベッドがきしむ音がし、ドアが開いた。
勇人がくしゃくしゃの髪を押さえながら、眩しそうに祐子を見ている。
「俺、寝てるんやって…。」
「そこをなんとか！」
祐子は勇人に両手を合わせて言った。
「今夜、手ごねハンバーグにするからさっ！」
勇人は祐子が作るハンバーグが好きである。
「しゃぁないな。」
「先生、よろしくっ！」
祐子がそう言いながら勇人の肩をぽんっと叩いた。
勇人はまだふらふらしながらも、玄関に向かった。そして、一旦のぞき穴で外を見てから、ドアを開けた。
「はい？」
外の女性が驚いた目をしたが、慌てて愛想笑いのような笑顔を見せ

た。

「私、最近この近辺を回らせていただいておりまして…」
「どちらの宗教さん？」
「え？…ええと…〇〇団体と申します。」
「あー…キリスト教さんやね。うちは曹洞宗やから…」
「あっいえ…！宗派は関係なくお話を聞いていただいているんです。少しお時間をいただけますか？」
「んー少しならええですよ。」
「ありがとうございます。あの、このところ景気も悪く…」
「ああ、待って。…そのお話の前に聞きたいことがあるんです。」

女性はいきなり話の腰を折られ、目を見開いて勇人を見た。

「…はい、なんでしょう？」
「そちらは、唯物論ですか？観念論ですか？」
「？…ゆいぶつ…？」

こっそり、和室に隠れて聞いていた祐子も（なんじゃそら）と思った。

「唯物論と観念論。わからないですか？」
「えっえっと…それは、上の者に聞かないと…」
「そう。じゃぁその人に聞いてからまた来てください。」

勇人はそう言うとドアを閉じ、音を立てて鍵を締めた。

「お見事ー！」

祐子はそう言いながら、和室から拍手をして勇人を讃えた。

「…コーヒー入れて。」
勇人はくしゃくしゃの髪を両手で梳きながら、ダイニングテーブルの前に座った。
「喜んで！」
祐子は棚の上から、コーヒーメーカーを下ろしながら言った。
「いつもながらお見事やけど、さっき言っとったん何？」
「唯物論と観念論か？」
「そう。」
「あの人は知らんかったみたいやけど、宗教はほとんどが「観念論」なんや。精神的なものが先って言うんかな。」
「？？？？」
祐子はわからないままマグカップを2つ、勇人の前に置いた。
「つまりこのマグカップでも、物質的にここにあるから、それを俺らが視神経から見て「マグカップがある」…と思てる。」
「…うん…」
「それが「唯物論」や。その反対が「観念論」。このマグカップは、俺が「ここにある」と思ってるから存在しているだけで、俺が「ない」と思ったら「存在していない」ことになる。」
「？？？？？」
「うーん、マグカップじゃわからんかな。コーヒー湧くの待つわ。」
勇人はそう言って、腕を組んで黙った。
祐子は慌ててコーヒーメーカーのスイッチを入れた。お湯が落ち、

コーヒーのいい香りが広がり始めた。
…コーヒーが湧き、祐子はマグカップにコーヒーを注いだ。勇人はコーヒーをひと口飲んで言った。

「これ「ブルマン（＝ブルーマウンテン）」やろ。」

祐子は口に含んだコーヒーを吹きかけて、慌てて口を押さえながら言った。

「普通の「ブレンド」やで。」
「これは「ブルマン」や。」
「ちゃうて。１袋３９８円の「ブレンド」ですがな。」
「いや「ブルマン」や。」
「もお何言うてんの！「ブレンド」や言うてるやん！ほら袋も…」
「俺は「観念論」で言うてる。」
「！？」

祐子は目を見開いた。

「意味わかった？」

勇人がしたり顔で言った。祐子が目を見張ったままうなずいた。

「確かにこれは「物理的」には、いつもママが買ってくる安売りの「ブレンド」や。でも、観念論者が「ブルマン」やと思たら、これは「ブルマン」になる。…考えて見？同じコーヒー豆でも「ブレンド」やと思って飲むのと「ブルマン」やと思って飲むのと、どっちが幸せや？」
「そりゃ「ブルマン」って思った方が…」
「やろ？宗教に「観念論」が多い言うのは、そういう事や。」

「なるほど…」

勇人は、また一口コーヒーを飲んで言った。

「ちなみに「曹洞宗」は「禅宗」やろ？」

「えっ…うん。」

「「禅宗」は、どっちでもないっていうんかな…「問答法」って言うんやけど、例えば「このマグカップは観念的に存在しているのか、物質的に存在しているのか？」と疑問を持ったとする。それを「禅」を組むことによって追求するわけや。」

祐子は「キリスト教は？」と尋ねた。

「そりゃ観念論やろ。…でも同じキリスト教でも、団体によって違う可能性もあるけどな。」

「唯物論の宗教ってあるんかな？」

「さあなぁ。「唯物論」はいわゆる「物理」やからな。つまり「宗教家」と「物理学者」が相反するものやって言ったらわかるか？」

「あーっ！それならわかる！と言う事は「遺伝子学者」も「唯物論」やな？」

「そうなるな。それは結局「有神論者」と「無神論者」の違いにもつながるわけや。」

「！…なるほど！」

「…でもな…。科学者には「有神論者」が多い。」

話がずれてきたけど、ま、いっか…と祐子は思いながら「なんで？」と言った。

「宇宙の創成がどうだったかって、科学者たちが真理を見つけようとしてるやろ？」

「ビックバンちゃうん？」
「そう。そのビックバンというのは、何もないところから起こるわけがないんや。何らかの物質が元々あって起こった。…だけど、その物質自体はどうやってできたんや？」
「…わからへん…」
「わからへんやろ？だから「神」がいたからや…という考えになる。」
「！！」
祐子は感心しながら言った。
「先生、コーヒーおかわりどうですか？」
「うむ、いただこう。」
勇人はそう言って、祐子に空のマグカップを差し出した。祐子はコーヒーを注ぎながら言った。
「先生、質問。」
「なんだね？」
「…ママも勇人もパパもあやめも…今、ホンマに存在してるんやろか？」
「さてね。」
勇人はそう言って、にやりと笑った。
「禅でも組んで考えたら？」
「なるほど！うちは曹洞宗やしな！」
祐子がそう言うと、勇人は「ええ落ちがついたな。」と言って笑った。

（終）

……

祐子さんより追記：私は親ばかですから、息子の知識には感心するばかりなんですが、専門家の方がお読みになると失笑されるのではないかと…。ちなみに息子の学校での成績は「中の下」です（^^；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2502x/

阪神淡路大震災

2011年10月20日08時23分発行